

マスコミュニケーション学科卒業論文関係資料集

成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科

2021年6月

目次

(A) 卒業論文の要件と評価基準	1
(B) 2021年度の特別措置	2
(C) マスコミ学科卒業論文作成マニュアル	3

(A) 卒業論文の要件と評価基準

I 要件

卒業論文は、以下の6つを満たしている必要がある。

- 要件1 本文の分量は、2万字相当以上
- 要件2 不適切な引用がないこと
- 要件3 文章構成が論理的で文章がわかりやすいこと
- 要件4 口頭試問における説明が明快であること
- 要件5 所定の手続き(『履修の手引き』とマスコミ学科卒業論文マニュアル参照。とくに、引用の仕方と文献表の作り方には要注意)にしたがって作成していること
- 要件6 指導教員の指導により、執筆していること

II 評価基準

Iの要件を満たした卒業論文を評価の対象とし、以下の基準で最終的な評価を決める。

- 基準1 十分な量のデータ収集
- 基準2 問題意識・着眼・テーマ・方法・結論などの独創性
- 基準3 問題設定・調査方法・分析の適切性
- 基準4 先行研究のレビュー
- 基準5 作業量と努力

以上

(B) 2021 年度の特別措置

新型コロナウイルス感染症に関わる諸々の措置に鑑み、2021 年度、以下の点について、指導教員の指導と承認を条件として、許可する。

- ・ Google フォーム等のインターネットを通じた質問紙調査

特に調査票の作成と、集計・分析については、教員の確認を得ること

なお、電話、スカイプ、ズーム等、テレコミュニケーションを介した面接調査については、例年通り認める。必ず、指導教員の指導と承認のもと、実施すること。

(C) マスコミ学科卒業論文作成マニュアル

0 はじめに

卒業論文は、大学で学んできたことの総決算であり、卒業するための「最後の大仕事」である。以下の書式を守って作成し、『履修の手引き』にある「卒業論文提出要領」(p. 15) および Webclass マスコミコミュニケーション学科 4 年生コースにある、学科生向け「卒業論文提出要領」(2021 年秋にアップ予定) にしたがって提出する。そのうえで、口頭試問を経て可否(評価)が決定される。

簡単に「(学術研究)論文」とはなにかについて述べておく。周知のように、マスコミュニケーション現象の研究は、社会心理学や社会学、歴史学といったさまざまな学問分野で開発されてきた方法を用いて行われている。そのために、あるべき論文の理想像について唯一絶対のものはない。だが、「学術研究論文」としての最低要件、調査報告書との違いといったものを、原則論として指摘することはできる。

たとえば、生物学者の八杉龍一は『論文・レポートの書き方』においてつぎのように述べている。

論文は、それぞれの学問分野で専門の研究者によって書かれるもので、その著者が自分の研究でえた結果を報告し自分の意見を述べたものであり、それによってその学問分野に新知見をもたらすものである。(八杉 1971: 16-17)

「自分の研究でえた結果」と「新知見」というところがポイントである。この点をさらに明確にするために、教育学者の斉藤孝が『学術論文の技法』において、Roth (1966) から引用して、「研究論文」とはいえないものをリストアップしているので、それを紹介する。

1. 1冊の書物や1篇の論文を要約したものは研究論文ではない。
2. 他人の説を無批判に繰り返したものは研究論文ではない。
3. 引用を並べただけでは研究論文ではない。
4. 証拠立てられない私見だけでは論文にならない。
5. 他人の業績を無断で使ったものは剽窃であって研究論文ではない。

(Roth 1966: 8-10. 斉藤 1998: 7-10 より重引)

本マニュアルは、学術研究論文として卒業論文に求められる要件を述べている。熟読玩味し、遵守すること。

なお、卒業論文は、提出しただけでは評価の対象とはならない。例年1月から2月に実施される口頭試問に出席し、審査担当教員の質問に答え、重大な形式上の不備があったときには、例外として認められる修正を実施することが必要である。ただし、原則的には、卒業論文は、提出時点のものが最終形態であり、そのまま審査対象となり、製本される。くれぐれも形式上の不備のないように提出前にチェックすることが求められる。

1 卒業論文の構成

卒業論文の構成および順序は基本的に以下の通りとする。

表紙：卒業年度、所属ゼミ名（ゼミナール担当指導教員名）、論文題目（やや大きく）、学部・学年・クラス・出席番号、学籍番号、氏名、を明記した用紙を黒表紙に貼り付ける。

タイトルページ（中表紙）：表紙と同じく、卒業年度、所属ゼミ名（ゼミナール担当指導教員名）、論文題目（やや大きく）、学部・学年・クラス・出席番号、学籍番号、氏名、を明記する（表紙と中表紙に関しては『履修の手引き』の説明を参照すること）。

論文要旨：400字から1000字程度とする。論文の目的は何か、どんな研究活動（調査、資料の分析等）を行ってどのような結果を得たか、どのような結論を導いたかを簡潔に述べる。論文要旨には、本文とは別に、各ページ下中央にページ番号を付ける（ローマ数字 ii とすることが多い。以下、本文の前まではローマ数字でページを付けていく）。なお、「イントロダクション」のような論文要旨をよく見かけるが、論文要旨においては、結果や結論まで手際よく紹介することが必要である。

目次：各章のタイトル、各節のタイトルおよび開始ページ数を明記する。

図一覧・表一覧：（なくても可）

用語解説：（なくても可）

本文：本文の第1ページを卒業論文の第1ページとする。ページ番号は最終ページまで通しで付ける。

注：本文で述べきれなかった内容を注として記したい場合は、本文の後に注を付ける。各章の最後あるいは各節の最後に置いてもよい。

付図・付表・付録など：調査に使用した調査票や実験に用いた刺激などを適宜添付する。
文献リスト：参考文献と引用文献のリスト（一覧表）を作成する。参考資料を用いた場合はそれらについても記載する。著者姓名のアルファベット順または50音順で記載する。
あとがき：謝辞ほか、述べておきたいことがあれば最後に簡単に述べる（なくても可）。

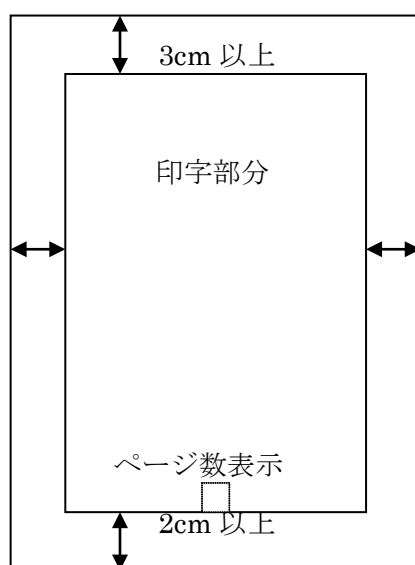
2 卒業論文の書式

卒業論文は、紙で出力し、教務部提出のもの（紙版＝正本）と、デジタルファイル（デジタル版＝副本）を提出する。提出手順については、マスコミ学科生向け「卒業論文提出要領」（2021年秋にアップ予定）を参照し遵守すること。

なお、2021年度は、新型コロナウイルス感染症の動向次第で、コロナ禍の影響で、教務部への紙版（＝正本）の提出方法が変更になる可能性がある。

基本的なことであるが、調査結果が数量的なものであっても文章の形で本文において記述報告することが論文には求められる。要点をまとめたりした「表」や「図」は分量としては、本文の一部とみなすが、これはあくまでも文章記述の補助である。「注」は本文の必要最低字数として数えるが、「文献リスト」や「添付資料」などはこの字数に含めない。なお、必要最低字数は、各ゼミ指導教員の指示により、上の分量を上回ることがある。

卒業論文は、A4用紙を用い、1ページあたり40字×30行（原稿用紙3枚分）とする。なお、製本の関係上、各ページの周囲に以下のような2センチメートル前後の余白を設ける。



3 卒業論文の文章表記

文章表記に関する注意事項は以下の通りである。不明な点については指導教員の指示に従うこと。

3-1 かなづかい・文字の大きさなど

- ・現代かなづかいを用いる。接続詞、副詞はなるべくかな書きとする。
- ・原則として常用漢字を用いる。ただし固有名詞、専門用語などは常用漢字以外でもよい。
- ・文体は「である」体に統一する（「であります」、「です」体は不可）。
- ・改段落後の頭は1字下げることが原則である。ブロック引用後の本文冒頭などは、かならずしもこのかぎりではない。行のはじめに括弧や句読点がこないようにする（禁則）。
- ・適宜改行し、段落をつける。ひとつの段落にひとつの主張（論点）、とする。つまり、ひとつの段落でふたつ以上のこと（論点）を言おうとしないこと。
- ・ひとつのセンテンスを必要以上に長くしない。読みやすい表記をこころがける。
- ・アルファベット表記は基本的に半角文字とするが、略称表記は全角文字とする。手書きで作成する場合、アルファベット表記は活字体とする。なお、いずれの場合も、固有名詞表記は各単語の頭文字のみ大文字とする。
- ・数字表記は半角文字、全角文字のいずれでもよい。
- ・基本的に、黒色インクを使用する。図や表、写真に関してはこの限りではないが、将来利用されるときには白黒コピーされるということを想定しておくことが望ましい。
- ・日本語の正字法にしたがうこと。本文中での、以下のような記号の使用は出来るだけ避けること。？、！、“、”、<、>、～、+など。

3-2 固有名詞の表記

- ・地名は、漢字使用地域以外のものはカタカナで書く。ただし、初出のときに（ ）内に原語の綴りを付記する。
- ・人名は、漢字以外のものはカタカナまたは原語で書く。カタカナで書く場合は、初出のときに（ ）内に原語の綴りを付記する。
- ・外国の機関や職制などの名称は、カタカナ表記でも原語表記でもよい。ただし、初出のときに（ ）内に、カタカナ表記の場合は原語の綴りを、原語表記の場合はカタカナを

付記する。

- ・略称や略語は、漢字の場合も原語の場合も、初出のときに（ ）内に非省略形を付記する。2回目以降でも、長い間隔をおいて出現した場合には、非省略形を（ ）内に付記するとよい。

3-3 数字の表記

- ・数字表記には基本的にアラビア数字を用いる。
- ・桁数の多い数字は、例えば「23 億 5368 万 2958 円」のように、「億」や「万」などの漢字を補って書くなど、適宜わかりやすく表す。

3-4 各章・各節のタイトル表記

- ・新しい章を書き始めるときはページを改める。各章のタイトルはやや大きく、センタリング（あるいは5字下げ）して表記する。
- ・新しい節を書き始めるときは、前の節との間を1行あける。各節のタイトルは、左詰めとする。

3-5 先行研究や文献・資料への言及

- ・「はじめに」のところで述べたように、学術研究論文は「自分の研究でえた結果を報告」するものである。先行研究や文献・資料に言及する場合には、原著の主張や表現と、引用者である卒業論文著者のものとを峻別して、それが読み手にわかるようにすることが必要である。引用の「ためにする」引用は、学術研究論文には不適切である。自分の議論のためになにをどう利用（引用）しているかを明確に示すことが求められる。
- ・先行研究などを引用することには、その「使用」にあたり、原著者の権利を尊重する責任が生じる。下記にしたがって引用を行い、文献リストを論文末に添付するということがきびしく求められているのはこのためである。言い換えれば、これは、そのような研究や指摘をだれが最初に行ったのかを明示してその貢献をたたえる一方、万一、その記述などが誤りであったときには、引用者はそれに責任がないということを留保するためでもある。
- ・研究例として列挙したり、その内容を引用者の言葉でまとめて紹介したりする場合（間接引用）には、参照文献の著者名と出版年とを文中に（ ）で明記する。

- ・間接引用の特別な使用例として、概略的な記述を行う場合に、ある部分を、いくつかの文献にたよってまとめることがある。たとえば、喫煙行動の観察研究を報告する卒業論文において、たばこの歴史を紹介するための節を書くとして。このときに、上野堅寛（1998）の『タバコの歴史』（大修館書店）を使う場合には、節の冒頭につきのように記して、その後の言及を省略することができる。「なお、この節の記述は、上野（1998）の内容をまとめたものである。」
- ・以下に具体例を示すが、これらは、全体の統一のために、あるものは若干表記を変更していることをことわっておく。

[間接引用の例：カツとラザースフェルド（1955=1965：14）より]

これと関連して、人びとをその所属集団から引きはなそうと試みるコミュニケーションは拒絶されるということが、第2次世界大戦中のドイツ軍に対する連合国の宣伝を研究したシルズとジャノヴィッツ（Shils and Janowitz 1948）によってあきらかにされている。

- ・引用文献中の表現をそのまま使用する場合（直接引用）には、その部分の長短によって、引用記号を使用した引用とブロック引用とがある。前者の場合は、引用箇所を引用記号「」でくくって本文中に埋め込み、引用末尾に（ ）で著者名と出版年、引用箇所（ページ）とを示す。なお、直接引用においては、引用文の言い替えは一切許されない。誤字と思われるものなどには、「ママ」と付記する（「原文のまま」の意味）。ただし、旧仮名遣いや漢字の旧字体を新字体にあらためることは許されるが、その旨を明記する必要がある。括弧などを使用して注を付す場合も、原著者によるものか引用者によるものを区別できるようにすること。

[直接引用・引用記号（「」）でくくった例：片桐（2003：80）より]

「現実とは現在の中にある」ということは、現実とは、過去の中にはないことになる。過去は客観的な事実ではなく、現在の観点から構築されることを、その表現は含意している。「われわれの過去についての確証は、構築された（constructed）過去と、構築とは独立した現実の過去との一致によって得られるものでは決してない」（Mead 1932=2001：41）とミードは言う。一方に、構築された過去

があり、一方に構築とは独立した現実としての過去があり、構築された過去に符号したときに、客観的な記述になると考えられるものではない。

- ・ブロック引用の場合は、引用部分の前後は1行ずつあけ、引用部分は本文より2字下げで記述する。引用文の最後の行に、()で著者名と出版年、引用箇所(ページ)とを示す。引用文献の冒頭や引用後の本文の冒頭で1字下げとするかどうかは、段落構成の問題であり、その点から判断すること。なお、インタビューで採取した語りを起こしたものを長く提示する場合は、ブロック引用の書式を踏襲すること。ただし、ブロック引用、インタビューの起こしのいずれの場合も、分量が多い場合は、その部分だけ、本文のフォントよりもひとまわり小さなフォントサイズを使用してもかまわない。たとえば、本マニュアルにおいては、本文は10.5ポイント、引用例では、9ポイント(強調のためにゴシック系フォントとしているが、卒業論文でゴシックにはしないこと)を使用している。
- ・引用している文献の著者が2人の場合は、2人を列挙する。3人以上の場合は、下記例の本文のように全員を列挙してもよいし、ほかの文献と区別が可能なきには、「シーガルほか」としてもよい。とくに、引用先の文献を括弧を使って示すときには、第1著者だけを明示して「ほか」で省略してもかまわない。もちろんのことだが、文献リストにおいては著者は全員を挙示する。

[直接引用・ブロック引用の例：Cole(1996=2002: 3)より]

最近、同じ主張が、長年比較文化的研究にたずさわってきた4人の心理学者、M. シーガル、P. ダーセン、J. ペーリー、Y. ポーティンガによってなされている。

人間の生活の複雑さと、行動の決定要素としての文化の役割の重要性を考えれば、行動の諸原理が立証されたと考える前に、当然、心理学者は、それらの諸原理の比較文化的な一般性を検証すべきである。したがって、人間行動についての科学が比較文化的な視点をもつことを求めるのは、明らかである (Segall ほか 1990: 37)。

この線に沿った主張はあまりに常識的と見え、なぜこのように明白に正しい視点が、心理学という

学問に相応の影響を与えなかったのかを理解するのは難しいだろう。

[インタビューで採取した語りを起こしたものの例：山本（1996：81）より]

しかし、日本に帰れない事情は他にもある。日本の家族や親族の反対を押し切って結婚し、渡韓してきた経緯からも「日本には帰れない」と、彼女たちは言うのである。

Aさん：私は好きで（韓国人と）結婚したやろ。誰に頼まれたわけでもないし、お父さんは大反対したからな。こういう生活しているのは自分の罪だと思っている。責任やと。

このようなくつもの事情で日本に帰れない彼女たちではあるが、しかし、日本を忘れたわけではない。故郷の親きょうだいを想う気持ちは強く、彼女たちが語る故郷の友人、自然、風土、街並みは、実に美しく、懐古的である。

- ・新聞や辞書からの引用は、とくに文献リストに挙示することをせずに、本文の当該箇所
で出典を示す。なお、直接引用している文中で引用記号が使用されている場合は、それ
を二重かぎ（『 』）とする。

2005年2月5日の『読売新聞』夕刊によると、2003年春の入試から、「優秀な高校2年生の大学
入学を認める『飛び入学』制度を導入した、成城（東京）、昭和女子（同）、エリザベト音楽（広島）
の3私大が、いずれも出願者ゼロに終わり、試験の実施を見送った」。

- ・ホームページから官庁統計などを引用する場合は、紙媒体の文献注に準じて（著者名 出
版年）または著者名（出版年）という形で示し、後ろの文献リストに、URL とアクセス
の年月を明示する。アクセスの年月を入れるのは、その資料がいつの時点でそのホーム
ページに掲載されていたかを明示するためである。

文部科学省のホームページによると、公立の小・中・高等学校及び特殊教育諸学校における2018
（平成30）年度のいじめ認知件数は、54万3933件で前年比31%増と大幅に増えている（文部科学
省2019）。

文部科学省，2019，「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」，
文部科学省ホームページ，(2021年5月18日取得，
https://www.mext.go.jp/content/20191217_mxt_syoto02-000003300_8.pdf).

- ・重引（孫引き）は、基本的に避けるべきである。重引が望ましくないのは、引用者が原著者を正確に引用しているとはかぎらないからである。引用するときは、自分で原著（オリジナル）にあたるのが学術研究の基本である。原著が入手や閲覧がきわめて困難であったりする場合には、やむをえず重引を認めるが、重引していることを引用箇所においても、文献リストにおいても明示することが必要である。

3-6 注の表記

- ・注を必要とする場合は、本文中のその箇所の右肩あるいは文末に「1」、「(注1)」などの数字を付けておく（可能であれば、上付きとする）。注の文章は、章末、節末、あるいは巻末に一括して示す。

[本文中の表示の例：今田（1998）より]

そして、若者の多くが物と一体化した象徴的イメージを買う記号消費の時代が訪れ、物を消費するのではなく、物に付着した記号的意味を消費することで「心の豊かさ」を確認するという自己実現の方法が登場した。しかしこうした行為は所詮、物質社会の論理に従属したものでしかなく、様々な病理現象が帰結した。⁶⁾

若年であることがポスト物質指向に対して効果を持たないという本稿での分析結果は、若年世代が物に託した自己実現に偏向していることのあらわれである。

[注の例：今田（1998）より]

[注]

- ¹⁾ 近代化はますますナルシズムやヘドイズムなど非難すべき価値観の増大をもたらしたり、コンシューマリズムや私生活主義など非道徳的な倫理を強化する、と議論する社会学者も存在する(Lasch 1978; Sennet 1977; Baudrillard 1970)。しかしながら、彼らの議論は価値観やアイデンティティを高度に一般的な水準で議論するにとどまり、必ずしも経験的なテストに耐えうるものではない。また、彼らの議論は、価値観や自己アイデンティティの基盤となる従来の意味システムや所属組織が正当性を確保できなくなった状況に対する認識が欠落しているように思われる。
- ²⁾ 1995年社会階層と移動全国調査の設計と回収状況（含む調査票）ならびに基礎集計については1995年SSM調査研究会（1996; 1997）を参照せよ。なお、この調査データを用いた分析結果は、1998年3

月に報告書として刊行される予定である。

- 5) ポスト物質指向ではなく現状維持の傾向をあらわす因果図式を求めようとする問題意識に立脚すれば、地位競争不安が現状維持にどの程度の影響力を持つかというモデルを想定することも可能である。しかし、その場合には、階級集団とイデオロギーを基盤とした階級政治から地位政治への転換という枠組みのもとで分析されるべきである。本稿は、階級政治から地位政治への転換は既に終了しているとすする立場に立っているためそのようなモデルは想定していない。
- 6) こうした病理現象の例として、大平健(1990)のいう「モノ語り人間」や中島梓(1991)のいう「コミュニケーション不全症候群」が指摘できる。

3-7 文献リストの作成

- ・引用文献は巻末に、著者の姓のアルファベット順または50音順で一括して示す。アルファベット順の場合、日本人著者については、姓のローマ字表記に基づいて順序を決める。日本人以外の著者については、姓のアルファベット順で記載する。姓を先に書き、カンマを付してからファースト・ネーム、ミドル・ネームを書く。「Mead, G. H.」のように、姓以外は太文字一文字で表記してもよい。綴りは原語のままとするが、日本語訳が出版されている場合は、カタカナ表記してよい。
- ・同一著者による複数の文献を参考にする場合は、出版年（発行年）の古いものから列挙する。同一年に出版（発行）された文献が複数ある場合は、「山田太郎 1995a」、「山田太郎 1995b」のようにアルファベットの添字で識別できるようにする。
- ・各文献の記載は、基本的に、著者名、出版年（発行年）、題名、出版社名（雑誌名）、頁（雑誌の場合）の順とする。外国語文献の翻訳書を参照した場合は、原著の著者名、出版年、出版社名に続けて、訳者名、翻訳書の出版年、翻訳書の出版社名を明記する。なお、出版年はできるだけ初版または第1刷の刊行年にする。なお、月日は不要である
- ・単行本を記載する場合はタイトルを『 』内に示し、論文を記載する場合は「 」内に示す。
- ・書式は、各文献の1行目のみを左詰めとし、2行目以降は2字インデントする。各文献の最後は、「.」（ピリオド）を付す。
- ・編著書中の論文については特に注意すること。本全体の編者名ではなく、各論文の執筆者名（その内容に責任を持つ人）で引用すること。文献リストにも、論文執筆者の姓名で掲載する。具体例としては、文献リストの山本（1996）を参照せよ。
- ・3年次の演習で作成した小論文に言及する場合、これも文献リストに挙示する。具体例としては、植田（2005）を参照せよ。なお、これは架空の例である。
- ・重引しており原著（オリジナル）を自身で確認していないものには、「*」を文献の頭に付ける。重引元の文献もリストに挙示すること。

- ・ 文献リストは、本社会学会『社会学評論スタイルガイド』を参考にするとよい。
<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/>。実例は、本マスコミ学科卒業論文作成マニュアルの最終（15～16 ページ）にある。ただし、このリストは、さまざまなタイプの文献の書式例を示すために本マニュアルで引用していない文献が掲載されたり、引用しているにもかかわらず掲載されていなかったりしている。

3-8 図表の掲示

- ・ 図表は、本文中の関連箇所に挿入する。巻末に一括して掲示するという形にはしない。繰り返しとなるが、図表はあくまでも補助であり、その内容やそこに盛り込まれている情報は本文中で記述説明することが求められる。
- ・ 各図、各表に、「図 1」、「表 1」などの通し番号を付ける。
- ・ 各図、各表にその内容を表す表題を付ける。
- ・ 各図、各表に出所、単位、調査年月日（調査結果の場合）などを付記する。
- ・ 図表の横には本文を書かない。
- ・ 本文と図表の間を前後 1、2 行あける。
- ・ 図表について本文中で言及するときは、「表 1 参照」、「図 1 に示されるように…」など、図表番号を示す。

[図表の例：今田(1998)より]

表 3 地位競争不安、現状維持指向、ポスト物質指向 (%)

	よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	N
地位競争不安						
男性	6.9	19.0	19.4	34.6	20.1	1214
女性	5.0	17.4	19.8	34.8	22.9	1433
全体	5.9	18.2	19.6	34.7	21.6	2647
現状維持指向						
男性	18.5	28.3	28.5	19.0	5.8	1195
女性	23.9	35.3	25.0	12.7	3.2	1420
全体	21.4	32.1	26.6	15.6	4.4	2615
ポスト物質指向						
男性	45.0	34.7	14.4	4.7	1.2	1212
女性	50.9	34.3	11.7	2.9	.3	1433
全体	48.2	34.4	12.9	3.7	.7	2645

注) 「わからない」という回答をした対象者数は、地位競争不安、現状維持指向、ポスト物質指向の順に、それぞれ 24、56、26 である。

[図表言及箇所（本文中）の例：今田（1998）より]

では、上記の変化は経験的に検証されうるだろうか。表 3 には、地位政治にかかわる地位競争不安と現状維持指向ならびに生活政治にかかわるポスト物質指向について、対象者の回答結果を示してある。

4 提出まえの最終チェックポイント

卒業論文は、提出後は、原則としていっさい変更できない。口頭試問後、正本はそのまま製本所へと送られ、卒業式当日に返却される。最終チェックはくれぐれも念入りに行うこと。以下に、よく見られる問題を列挙しておく。

- ・論文の題目は、表紙とタイトルページ、論文要旨（もし題目を入れた場合）でまったく同じものとなっているか。
- ・目次には、各章や節の開始ページが入っているか。
- ・各章や節のタイトルが目次のものと同じものとなっているか。
- ・ページの脱落や重複がないか。
- ・表記は一貫しているか。調査協力者名などに仮名を使っている場合は、とくに注意すること。
- ・ひとつの図や表が、不注意で 2 ページにわたっているようなことはないか（もともと 1 ページに収まらないものは別である）。
- ・タイトルページからの順番に間違いはないか。ページ数はローマ数字になっているか。本文第 1 ページからはアラビア数字で、最後まで通し番号となっているか。
- ・文献リストはついているか。
- ・文献リストや付録にもページが入っているか。

文献リスト

- Becker, H. S. and Richards, P., 1986, *Writing for Social Scientists*, Chicago: University of Chicago Press. (佐野敏行訳, 1996, 『論文の技法』講談社.)
- Cole, M., 1996, *Cultural Psychology: A Once and Future Discipline*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (天野清訳, 2002, 『文化心理学——発達・認知・活動への文化 - 歴史的アプローチ』新曜社.)
- 今田高俊, 1998, 「社会階層の新次元——ポスト物質社会における地位変数」『社会学評論』48(4): 419-437.
- Katz, E. and Lazarsfeld, P. F., 1955, *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, Glencoe, IL: Free Press. (竹内郁郎訳, 1965, 『パーソナル・インフルエンス——オピニオンリーダーと人びとの意思決定』培風館.)
- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』世界思想社.
- Lofland, J. and Lofland, L. H., 1995, *Analyzing Social Settings: A Guide to Qualitative Observation and Analysis*, Wadsworth. (進藤雄三・宝月誠訳, 1997, 『社会状況の分析——質的観察と分析の方法』.)
- Mead, G. H., 1932, *The Philosophy of the Present*, Chicago: Open Court. (河村望訳, 2001, 『現在の哲学・過去の本性』人間の科学社.)
- 文部科学省, 2019, 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」, 文部科学省ホームページ, (2021年5月18日取得, https://www.mext.go.jp/content/20191217_mxt_syoto02-000003300_8.pdf).
- 日本エディタースクール編, 2003, 『パソコンで書く原稿の基礎知識——Word 2002 対応』日本エディタースクール.
- ———編, 2003, 『Word で本をつくろう——ヨコ組編』日本エディタースクール.
- *Roth, A. J., 1966. *The Research Paper: Form and Content*, Belmont, CA: Wadsworth. (斉藤 1998 より重引)。
- Segall, M. H., Dasen, P. R., Berry, J. W., and Poortinga, Y. H., 1990, *Human Behavior in Global Perspective: An Introduction to Cross-cultural Psychology*, New York: Pergamon. (田中国夫・谷川賀苗訳, 1995-96, 『比較文化心理学——人間行動のグローバル・パースペクティブ』北大路書房.)

- ・ 齊藤孝, 1998, 『学術論文の技法 第2版』 日本エディタースクール出版部.
- ・ Shils, E. A. & Janowitz, M., 1948, “Cohesion and disintegration in the Wehrmacht,” *Public Opinion Quarterly*, 12: 300-315.
- ・ 植田あゆみ, 2005, 「銭湯というコミュニティー——社会におけるコミュニティーの役割と存在意義」 成城大学文芸学部コミュニケーション演習Ⅱ小論文.
- ・ 山本かほり, 1996, 「在日韓国人妻の生活史」 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』 世界思想社, 62-88.
- ・ 八杉龍一, 1971, 『論文・レポートの書き方』 明治書院.